

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

《洛北の小さなフレンチ・レストラン「シエ・小島」さん》

フランスの田舎にあるような小じんまりとしたイメージ。店内は白い塗り壁に天然木の暖かみのあるテーブルと椅子、どことなく懐かしいような落ち着いた感じ。食べ応えのあるお料理と、さり気ないサービス。コース料理のメのデザートは◎夫婦で料理とサービスを担当するアットホームなお店はお家にいるようなホッとする空間で、素材の味を大切にしたい優しい味のお店です。

自宅から歩いて約6分位、サラダはサーモンとアヴォガド。スープはなんでも美味。メインは子羊のロースト。パンはフランス直送で何時もお替り手作りのデザートがまたフランスが良く皆さんのお楽しみです。ご夫婦で一生懸命に、真剣にお料理を作っている姿がほほえましい！
京都さきぞう会のワインのお摘みは何時も別注で作って戴いています。毎回大好評！

京都市京セラ美術館 開館記念公演

《デイヴァイン・ダンス 三番叟(神秘域)》

9月1日 ロームシアター京都サウスホールにて
三番叟は我が国に伝わる幾多の芸能の中でも最も古い形式を留める古曲である。その源は天照大神の天岩戸伝説の頃まで遡ることができると言われている。この舞は神が降霊する様を現したものであり神事として最も重い曲として扱われる。その曲の流れは時に静かに、時に激しく、舞を舞う生身の人間の身体に密かに舞い降りる神霊の姿が見え隠れする。

我が国における神の姿は古来より気配としてのみ現われる。その気配は現代社会へと墮した今日の日本にあっても、確実に存在することをあなたは目の当たりにする。そして神が秘そむ域であなたは息を潜める。
松羽目にかえて雷(いかづち)を染め抜いた幔幕をもって古代の神話空間とした。(解説:杉本博司)

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《阿呆船 下巻 / S プラント著》

世界中で猛威を振るうコロナウイルス。我国でも第二波到来への警戒が叫ばれている。感染拡大を阻止する切り札として期待されているのがワクチンの早期開発だ。各国政府は巨額の資金を製薬会社や研究機関に投入。今のところ英国や米国がリード。開発に成功すれば巨大市場を手に入れ、同時にその国の科学技術力の高さを誇示でき、ひいては自国の安全保障にも繋がる。翻って我国はどうか？安倍首相は「国際社会と共にワクチンの開発を急いでいます」と述べたが国内の開発支援予算額は他国に見劣りする。海外でのワクチン完成後は一定数を確保できるとしているが、自国民の健康・安全を他国に委ねてよいものだろうか？
政策の決定が遅く的確さを欠き、漂流している現在の「日本丸」。「安倍船長」や閣僚・官僚にはしつかりと舵取りをお願いしたい。

土口哲光和尚の説法

《死んでも命がありますように》

あれもほしい、これもほしいという時代はコロナ禍の蔓延で過ぎたように思える。それは煩惱は満たされず無尽であるという自覚である。「自粛」という綱をかけられ、欲望というものに気付きを覚えさせられる。灼熱のお盆に際して「六道まいる」が、今夏はとくに身近に戴ける。人間の迷い苦しみの世界を六道という。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六つの世界である。この世界は、飲食欲、色欲、睡眠欲、名誉欲、財欲の五つの欲のすべてが満たされ、死んでも命がありますようにと寿命も四千歳という。この五欲の満足と長寿は、まさしく現代人が飽くことなく求めてやまない境地である。楽園のような天上界でもやはり苦の世界であると仏は、仏教・真理を説かれる。

季節の家庭料理 田村 真紀

《九月 いろいろきのことチキンのフリカッセ》

《作り方・四人分》

鶏もも肉大二枚・マッシュルーム(四等分する)十二個・シメジ(小房に分ける)一パック・エリンギ(一口大に切る)一本・玉ねぎ半個・にんにく二片・バター二十グラム・白ワイン、生クリーム各三分の二カップ・小麦粉大匙一・塩適量
鶏もも肉は大きめの一口大に切り、全体に塩をふる。フライパンに並べ中火にかけ皮目から両面色よく焼き中まで火を通す。並行して別の鍋にバターを溶かし、みじん切りにした玉ねぎとにんにくを炒める。透き通ってきたらきのこ類と小麦粉を加え更に炒め、鶏肉を鍋に移す。フライパンに白ワインを投入してしつかり沸騰させ、鍋に加える。更に生クリームを加え軽く煮込む。

つれづれの記 山崎 辰巳

《あ・うん》

コロナウイルスの感染拡大に伴い、密閉・密集・密接の三密を控え、ソーシャル・ディスタンス(社会的距離)が奨励されている。マスク着用を前提に会話や接遇が行われ、テレビ番組ではリモート出演が盛んである。親愛の情を表す握手やハグがタブー視され、スポーツ競技は今も無観客試合が多く、選手同士のハイタッチなども禁じられ、親子間のスキンシップも罪悪感が伴う難しい時代だ。
人間同士が身近に親しく触れ合えなくても、日本人は古来、人を気づかい、相手をおもんばかる美徳をそなえ、他国の人以上に優れた阿吽(あうん)の呼吸術を心得ている。
物理的距離感が離れても、時には携帯やパソコンに頼らないで手紙や葉書のやりとりで、心が通いあう関係を保ちたいものだ。